みんなで守ろうみんなの地域

洪水の備えは万全ですか

阿賀野川水防演習

五月二十八日に建設省、県、流域市町村の主催による阿賀野川水防演習が新津市金屋地先で大規模に行われました。

演習には、横越村を始めとした阿賀野川流域の十一市町村から二千六百人が参加し、十一種類の水防工法を実演したほか、ヘリによる中州に取り残された人の救出訓練などが披露され、出水期を控えて、災害防止の大切さを住民に呼びかけました。

横越村から参加した消防団員六十名は2班に分かれ、阿賀野川が大雨で増水し堤防裏面に亀裂が入ったことを想定した「五徳縫い工」、堤防から水がしみ出たことを想定した「月の輪工」と呼ばれる工法で演習に参加しました。消防団員は日頃の訓練の成果もあり、手際よく工法実演を行いました。

【月の輪工】

出水中に、堤防裏側に漏水により水が吹き出し、その漏水口が拡大されるのを、土のうを積んで水の圧力を弱め堤防の欠壊を防ぐ方法です。

【五徳縫い工】

洪水の最中に、堤防の裏面に亀裂が生じたり、堤防の崩壊が拡大する場合があります。竹の弾力を利用して、この亀裂拡大を防ぐ方法です。

自衛隊の大型ヘリコプターも出動し、中州に取り残された人を救助する。

横越村の水害年表（百年間の主なもの）

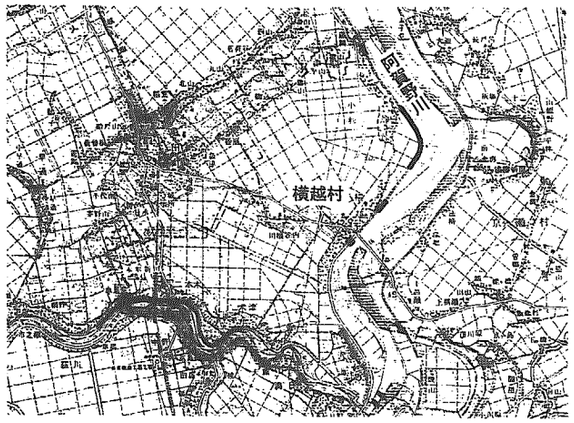
明治29年　木津切れ（五十間）
大正2年　木津切れ（百間）
大正3年　横雲橋一部流出
大正5年　曽川切れ（横越の一部を除き亀田郷水没）
大正13年　横雲橋一部流出
昭和6年　大雨で川根谷内の耕地水没、木津地区農民と水争い
昭和16年　横雲橋洪水で流出
昭和22年　横雲橋洪水で流出
昭和33年　横雲橋一部流出
昭和53年　6・26水害

大正二年　木津切れの堤防決壊

治水の歴史

横越村の歴史は有史以来水と闘い、水を治める歴史であったともいえます。大正二年の「木津切れ」の際にも亀田郷一帯が水浸しとなり大きな被害が出ています。その後、大正六年から昭和九年にかけて阿賀野川の大改修工事が進められ、沢海地区を大きく蛇行していた阿賀野川を直線化しました。沢海床固や、満願寺閘門もこの際作られた治水施設なのです。その結果、洪水による被害も大幅に少なくなったものの、昭和三十三年の洪水の際にも横雲橋が流出する被害が起きています。その後、昭和四十年代にかけて堤防の嵩上げ工事が実施されました。

〈 横越村の最重要水防箇所 〉



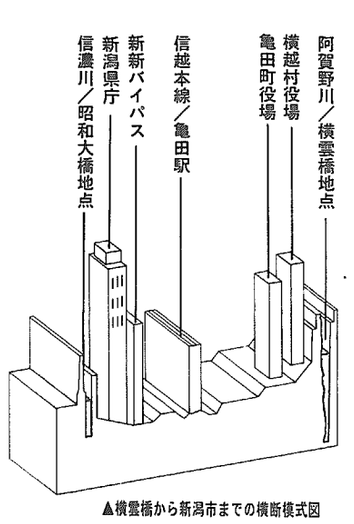
横越村は水害とは無縁か

治水事業が整備された現在では、悠々と流れる阿賀野川と高く強固に築かれた堤防を見たとき、「自分は水害とは無縁だ」と考える人も多いのではないでしょうか。

しかしながら、治水工事が進んだものの、阿賀野川は横越地区で大きく蛇行しています。そのため、洪水のたびに川底が大きくえぐられ現在では計画河床より八mから十mも深くなり、現在も引き続き低下しています。

このままの状態が続けば大洪水の際には堤防が決壊する危険性も出てきました。いったん決壊すれば横越地区だけでなく、亀田町、新潟市にまで及びその被害は計り知れないものとなります。

また、小阿賀野川も堤防の強度が低いため重点危険地区に指定されており、昭和五十三年には上木津で長雨のため堤防が一部土砂崩れを起こしたり、二本木でも増水で寿橋が流されそうになったため、消防団が出動した実績があります。



▲横雲橋から新潟市までの横断模式図

▲深堀れの進行による堤防の破壊

河川改修とふだんからの心掛け

建設省では平成三年度から阿賀野川の河川水理模型実験を行っています。さらに、この検討結果をもとに堤防の補強工事が計画されているところです。

私たちが快適で豊かな生活を送るためにも早期に治水整備を進めることが大切ですが、水害から身を守っていくためには一人ひとりが、水害に関して関心を持ち、いざという時に備えて、日頃から準備していることが大切です。自分でできることから始めてください。

水害準備のチェックポイント

①日頃から、天気予報や注意報に関心を持ちましょう。
テレビやラジオで天気予報を確認し、気象の移り変わりを正確に知るようにする。

②避難場所と経路を確認しておきましょう。
老人や子供、病人、婦人を優先的に、単独行動は避ける。

③緊急時の携行品をひとつにまとめて準備しておきましょう。
貴重品や衣類、非常食料、懐中電灯や携帯ラジオなどの準備。